

第3週間の水曜日

第19カフィズマ

第1段 第134、135聖詠

しゅ な ほ あ しゅ しよぼく しゅ いえ わ かみ いえ にわ た もの ほ あ しゅ
主の名を讃め揚げよ、主の諸僕、主の家、我が神の家の庭に立つ者よ、讃め揚げよ。主

ほ あ しゅ じんじ そのな うた こ たの けだししゅ おのれ ため
を讃め揚げよ、主は仁慈なればなり、其名に歌へ、是れ楽しければなり。蓋主は己の爲

にイアコフを選び、イズライリを選びて其業となせり。我主の大なるを知り、我等の主

の諸神より最も高きを知れり。主は凡そ欲する所を天に地に海に悉くの淵に

行ふ、雲を地の極より起こし、電を雨の中に作り、風を其庫より出す。彼はエギ

ペトの初子を撃ちて、人より家畜に及べり。エギペトよ、彼は爾の中に於て休徴奇

をファラオン及び其悉くの僕の上に遣せり。彼は多くの民を撃ち、有力の王を

滅せり、即アモレイの王シゴン、ワサンの王オグ、及びハナアンの諸國なり、彼等の

地を賜ひて業となし、其民イズライリの業となせり。主よ、爾の名は永く在り、主よ、

爾の記憶は世に在り。蓋主は其民を審判し、其諸僕に憐を垂れん。異邦の

偶像は乃銀、乃金、人の手の造工なり。彼等口ありて言はず、目ありて見ず、耳あ

りて聴かず、其口に呼吸なし。之を造る者と凡そ之を恃む者とは是と相似ん。イズラ

イリの家よ、主を崇め讃めよ。アアロンの家よ、主を崇め讃めよ。レウィの家よ、主を崇

め讃めよ。主を畏るる者よ、主を崇め讃めよ。イエルサリムに在す主はシオンに崇め讃め

らる。「ア ril イヤ」。＜145 聖詠省略＞

誦経 光栄は父と子と聖神に帰す。

(詠) 今も何時も世に、「アミン」

ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ、光栄は爾に帰す。(三次)

主憐めよ。(三次) 光栄は父と子と聖神^oに帰す。

誦経者の「光栄は」に続いて



今も 何時も 世 世に ア ミン アリルイヤ、アリルイヤ アリルイヤ

3回

神よ光栄は なんじに 帰—す 主 憐れめ 主憐れめ主憐れめよ、

誦経者の「今も」に続く

光栄は 父と子と 聖 神に 帰す

誦経 今も何時も世々に、「アミン」。

第二段 第 137-139 聖詠

われこころ つく なんじ さんえい しょてんし まえ おい なんじ うた けだしわ くち ことば なんじ
我 心 を盡して 爾 を讃榮し、諸天使の前に於て 爾 に歌ふ、蓋 我が口の 言 は 爾

ことごと これ き われなんじ せいでん まえ こうはい なんじ あわれみ なんじ しんじつ ため
悉 く之を聴けり。我 爾 が 聖殿 の前に叩拜し、 爾 の 憐 と 爾 が 眞實 の爲に

なんじ な さんえい けだしなんじ なんじ ことば こうだい もろもろ なんじ な こ
爾 の名を讃榮す、蓋 爾 は 爾 の 言 を廣大にして、 諸 の 爾 の名に逾えしめたり。

わ よ ひ なんじわれ き わ たましい いさ しゅ ち しょうなんじ くち ことば
我が呼びし日、 爾 我に聴き、我が 靈 を勇ませたり。主よ、地の 諸王 爾 が口の 言

き と き みななんじ さんえい しゅ みち うた けだししゅ こうえい おおい しゅ たか
を聴かん時、皆 爾 を讃榮し、主の途を歌はん、蓋 主の 光栄 は 大 なり。主は高く

へりくだ もの み ほこ もの はるか し われも かんなん うち ゆ なんじわれ い
して、 謙 る者を見、誇る者を 遙 に識る。我若し 艱難 の中に行かば、 爾 我を生かし、

なんじ て の わ てき いかり おさ なんじ みぎ て われ すく しゅ われ かわ
爾 の手を伸べて我が 敵の 怒 を抑へん、 爾 が右の手は我を救はん。主は我に代りて

おこな しゅ なんじ あわれみ よよ なんじ て つく もの す なか
行 はん、主よ、 爾 の 憐 は世世にあり、 爾 の手の造りし者を棄つる 母れ。

誦経 光栄は父と子と聖神に帰す。

(詠) 今も何時も世々に、「アミン」

アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、神よ、光栄は爾に帰す。(三次)

主憐めよ。(三次) 光栄は父と子と聖神^o に帰す。

誦経者の「光栄は」に続いて



今も 何時も 世 世に アミン アリルイヤ、アリルイヤ アリルイヤ

3回



神よ光栄は なんじに 帰一す 主 憐れめ 主憐れめ主憐れめよ、



光栄は 父と子と 聖 神に 帰す

誦経者の「今も」に続く

誦経 今も何時も世々に、「アミン」。

第三段 (第 140、141、 聖詠)

しゅ わ いのり き なんじ しんじつ よ わ ねがい みみ かたぶ なんじ ぎ よ われ
主よ、我が 祈 を聆き、爾 の 眞實 に依りて我が 願 に耳を 傾 けよ、爾 の義に依りて我

き たま なんじ ぼく うったえ な なか けだしおよ いのち もの いつ なんじ まえ ぎ
に聴き 給え。爾 の 僕と 訟 を爲す母れ、蓋 凡そ生命ある者は、一も 爾 の前に義と

てき わ たましい お わ いのち ち ふみにじ われ ひさ し もの ごと
せられざらん。敵は我が 靈 を逐ひ、我が生命を地に 蹂 り、我を久しく死せし者の如

くらき お わ たましい われ うち もだ わ われ うち むな ごと われいにしえ
く 暗 に居らしむ、我が 靈 は我の衷に悶え、我が心は我の衷に曠しきが如し。我 古

ひ おも およ なんじ おこな かんが なんじ て わざ はか わ て の なんじ
の日を想ひ、凡そ 爾 の 行 ひしことを 考 へ、爾 が手の工作を計る。我が手を伸べて 爾

むか わ たましい かわ ち ごと なんじ した しゅ すみやか われ き たま わ たましい
に向ひ、我が 靈 は渴ける地の如く 爾 を慕ふ。主よ、速 に我に聴き 給へ、我が 靈

おとろ なんじ かんばせ われ かく なか しか われ はか い もの ごと われ
は 衰 へたり、爾 の 顔 を我に隠す母れ、然らずば我は墓に入る者の如くならん。我

つと なんじ あわれみ き たま われなんじ たの しゅ われ ゆ みち しめ
に夙に 爾 の 憐 を聴かしめ 給へ、我 爾 を頼めばなり。主よ、我に行くべき途を示し

たま わ たましい なんじ あ しゅ われ わ てき すく たま われなんじ はし
給へ、我が 靈 を 爾 に擧ぐればなり。主よ、我を我が敵より救ひ 給へ、我 爾 に趨り

つ われ なんじ むね おこな おし たま なんじ われ かみ ねが なんじ ぜん
附く。我に 爾 の 旨を 行 ふを教へ 給へ、爾 は我の神なればなり、願はくは 爾 の善な

しん われ ぎ ち みちび しゅ なんじ な よ われ い たま なんじ ぎ よ
る神は我を義の地に 導 かん。主よ、 爾 の名に依りて我を生かし 給へ、 爾 の義に依り

わ たましい くだん ひ いだ たま なんじ あわれみ もつ わ てき ほろぼ およ わ
て我が 靈 を苦難より引き出し 給へ、 爾 の 憐 を以て我が敵を 滅 し、凡そ我が

たましい せ もの たいら たま われ なんじ ぼく
靈 を攻むる者を 夷 げ 給へ、我は 爾 の僕なればなり。

こうえい　ちち　こ　せいしん　き　いま　いつ　よよ
光榮は父と子と聖神に歸す。今も何時も世々に、「アミン」。

「ア ril イヤ」「ア ril イヤ」「ア ril イヤ」、^{かみ}神よ、^{こうえい}光榮は^{なんじ}爾に歸す。三次

^{しゅあわれ}主　憐　めよ。三次

<続けて誦経>

斎1 ^{セ　ダ　レン}【坐誦讃詞】

^{われら}我等は^{ものいみ}齋の^{よろこ}欣ばしき^{せいえん}盛筵の^{とき}時を^{とお}過りて^よ呼ぶ、^{しじん}至仁なる^{しゅ}主よ、^{われら}我等^{しゅう}衆を^{へいあん}平安に

^{まも}護りて、^{てき}敵の^{おそ}凡の^{あくぼう}悪謀より^{のが}脱れしめ^{たま}給へ。^{ひとり}獨^{だいじんじ}大仁慈なる^{しゅ}主よ、^{われら}我等に^{なんじ}爾の^{とうと}尊^{じゅうじゅか}き十字架、

^{なんじ}爾が^{せかい}世界に^{おのれ}己の^{じんじ}仁慈を^{たま}賜ふ^{ところ}所の^{もの}者に^{あい}愛を^{もつ}以て^{せつぶん}接吻する^えを得しめ^{たま}給へ。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々にアミン

十字架生神女讃詞、同調

ハリストスよ、^{どうていじょ}童貞女^{なんじ}爾の^{はは}母は^{なんじ}爾^き木に^か懸けられて^し死せし^{もの}者を^み覩て、^{いた}痛く^な泣きて^い曰へり、^わ吾
が^こ子よ、^こ此の^{おそ}畏るべき^{ひみつ}祕密は^{なん}何ぞや、^{しゅう}衆に^{えいえん}永遠の^{いのち}生命を^{たま}賜ふ^{もの}者は^{いかに}如何ぞ^{あまん}甘^{じゅうじか}じて十字架に
^は恥づべき^し死を^{もつ}以て^し死する。

<戻る。枠 P12、 50 聖詠 >

斎2 ^{カノン}【三歌經の規程】

第三歌頌、　聖アンナの歌句、列王記第一卷二章一至十節

右誦経句、^わ我が^{こころ}心は^{しゅ}主に^よ縁りて^{よろこ}喜^わび、^{つの}我が^わ角は^{かみ}我が^よ神に^{たか}縁りて^わ高くなり、^{くち}我が^わ口は我
が^{てき}敵の^{うえ}上に^{ひら}開けたり、^{けだしわれ}蓋^{なんじ}我は^{すくい}爾の^{ため}救の^{たのし}爲に^む樂む。

左誦経句、^{しゅ}主の^{ごと}如く^{せい}聖なる^{もの}者あらず、^{けだしなんじ}蓋^{ほかに}爾の外に^た他の^{もの}者なし、^わ我が^{かみ}神の^{ごと}如く^{けんご}堅固な
る^{もの}者あらず。

右 句、^{おご}驕れる^{ことば}言^いを^{なか}言ふ勿れ、^{きょうぼう}狂妄^{なんじ}をして^{くち}爾^いの口より出でしむる^{なか}勿れ。

左 句、^{けだししゅ}蓋^{えいち}主は^{かみ}睿智の神にして、^{わざ}行爲は^{かれ}彼に^{はか}權られたり。

右 句、^{かれ}彼は^{そのせいしや}其^{あし}聖者の^{まも}足を守る、^{ふほう}不法の^{もの}者は^{くらやみ}幽暗^{うち}の中に^き消ゆ。

~~イルモス—3調「主、爾を頼む者の堅固よ」~~

~~彼は其聖者の足を守る、不法の者は幽暗の中に消ゆ。~~

^{われら}我等の^{ため}爲に^{じゅうじか}十字架に^{てい}釘せられし^{もの}者と^{とも}偕に^{てい}釘せられて、^{われら}我等は^{ものいみ}齋^{きとう}と^{きがん}祈禱と^{もつ}冀願とを^わ以て^わ我が
^{にく}肉の^{したい}肢體^{ころ}を^{ころ}殺さん。

蓋人の力を持て堅固なるに非ず、主は之に敵する者を砕かん、主は聖なり。

^{なんじ}爾^{じゅうじか}を十字架を^{もつ}以て^{つみ}罪の^{いばら}荊棘を^ね根より^{たや}絶しし^{しゅ}主よ、^わ我が^{ちえ}智慧の^{いばら}棘^{おもい}の思^たを^{たま}斷ち^{たま}給へ。

^{なか}智者は^{なか}其の智を^{なか}以て^{なか}誇る勿れ、^{なか}強き者は^{なか}其の力を^{なか}以て^{なか}誇る勿れ、^{なか}富む者は^{なか}其の富を^{なか}以て^{なか}誇る勿れ。

^{われら}我等は^{ものいみ}齋^{たましい}を^{ぶき}靈^なの^{じゅうじか}武器と^{ちから}爲し、^{たす}十字架の^{こうてき}力に^{あくき}扶けられて、^{ぐん}抗敵する^か惡鬼の^か軍に^か勝たん。

誇らんと欲する者は主を悟りて彼を知り、且つ地の中に^{うち}審判と義とを行ふを以て誇るべし。

[生神女讃詞] ^{しじょう}至^{もの}浄なる^{ことば}者よ、^{なんじ}言は^み爾^とより^い身を取りて^い出でて、^{じれん}慈憐の^{おお}多きに^よ因りて、^{げんそ}原祖の^{だらく}墮落
^{きょうせい}を^{たま}矯正し^{たま}給へり。

~~イルモス—2調「木を以て罪を殺しし主よ」~~

^{のぼ}主は^{とどろ}天に^{はて}升起りて^{はて}轟^{はて}けり、^{はて}彼は^{はて}義にして^{はて}地の^{はて}極を^{はて}審判せん。

^{しゅ}主よ、^{いのち}生命を^{ほどこ}施す^{なんじ}爾^{じゅうじか}の十字架は^{われ}我の^{ため}爲に^{すくい}救^{いん}の^{いん}印なり、^{けだしわれ}蓋^{これ}我は^{もつ}此を^{こうてき}以て^{もの}抗敵する^{ちから}者の^{ちから}力を
^{むな}空しくして、^{なんじ}爾^{ぜんのう}を全能の^{かみ}神として^ほ讃め^{うた}歌ふ。

彼は力を以て其の王に賜ひ、其の^{あぶら}膏^{つの}つけられし者の^{あぶら}角を高くせん。

^{じゅうじか}十字架の^き木は^{えいえん}永遠の^{いのち}生命の^{ため}爲に^い活かす^み果を^{せかい}世界に^{しょう}生^{しょう}ぜり、^{われら}ハリストスよ、^{これ}我等は^{あじわ}之を^{あじわ}味ひ

て死より救はる。

光栄は父と子と聖神に帰す。

[聖三者讃詞] 我等は唯一の性の三位たる父、子、及び聖神を讃榮して、神性の唯一の權柄に伏拜

す、蓋 唯一の神は王として萬有を 司 り給ふ。

今も何時も世々に、「アミン」

[生神女讃詞] 潔 き者よ、爾 の産は畏るべし、蓋 人と爲りし者は神なり、無原に父より生れ、

末の時に 爾 より 夫 なくして生れ給ひし者なり。

我等の神よ、光栄は爾に帰す、光栄は爾に帰す。

洪恩なる主よ、十字架の恩寵の光線は已に世界に輝きて、我等衆を爾の神聖なる 苦 に呼

ぶ、我等に熱信を以て之に伏拜するを得しめ給へ。

(詠) イルモス2調 「木を以て罪を殺しし主よ、我等を暗示の中に堅めて、爾を畏るる畏を我等、爾を歌ふ者の心に植え給へ」

第3歌頌



木を 以て 罪を 殺しし 主ー よ、 我等を 爾の
うちに かためて 爾を畏るる お それ を
我等 爾を歌う者の ところに 植えた まーえ

【小連祷】

我等復又安和にして主に祷らん。

(詠) 主憐めよ。

神よ、爾の恩寵を以て我等を助け救ひ憐み護れよ。

(詠) 主憐めよ。

至聖至潔にして至りて讃美たる我等の光栄の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶し

て、我等己の身及び互に各の身を以て、并に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん。
(詠) 主爾に
司祭高聲 蓋權柄及び國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。(詠)「アミン」



第八歌頌、三少者の歌句、ダニイル三章五十七至八十八節

右誦經句 ^{しゅ}主の ^{ことごと}悉くの ^{ぞうぶつ}造物は ^{しゅ}主を ^{あがほ}崇め讃めよ、^{かれ}彼を ^{うた}歌ひて ^{よよ}世世に ^{ほあ}讃め揚げよ。

左誦經句 ^{しゅ}主の ^{しよてんし}諸天使、^{しゅ}主の ^{しよてん}諸天は ^{しゅ}主を ^{あがほ}崇め讃めよ、^{かれ}彼を ^{うた}歌ひて ^{よよ}世世に ^{ほあ}讃め揚げよ。

右 句 ^{しよてん}諸天の ^{うえ}上に ^{あみず}在る水、^{しゅ}主の ^{ばんぐん}萬軍は ^{しゅ}主を ^{あがほ}崇め讃めよ、^{かれ}彼を ^{うた}歌ひて ^{よよ}世世に ^{ほあ}讃め揚げよ。

左 句 ^ひ日と ^{つき}月と、^{てん}天の ^{ほし}星は ^{しゅ}主を ^{あがほ}崇め讃めよ、^{かれ}彼を ^{うた}歌ひて ^{よよ}世世に ^{ほあ}讃め揚げよ。

右 句 ^{てん}天の ^{もろもろ}諸の ^{とり}鳥、^{やじゅう}野獸と ^{いっさい}一切の ^{かちく}家畜と ^{しゅ}主を ^{あがほ}崇め讃めよ、^{かれ}彼を ^{うた}歌ひて ^{よよ}世世に ^{ほあ}讃め揚げよ。

~~イルモス、「敬虔の範たる少者は堪へ難き火に入れられしに」。~~

~~^{もろもろ}天の ^ほ諸の ^ほ位鳥、^あ野獸と ^あ一切の家畜と ^あ主を ^あ崇め讃めよ、^あ彼を ^あ歌ひて ^あ世々に ^あ讃め揚げよ、~~

~~^{じゅうじか}十字架を ^{もつ}以て ^{くらやみ}幽暗の ^{しゅりようおよ}首領 ^{けんべい}及び ^か權柄に ^{ことば}勝ちたる ^{いのち}言、^{ほどこ}生命を ^{しゅ}施す ^{けん}主よ、^{もつ}權を ^{ぜん}以て ^{せかい}全世界を ^{しんばん}審判~~

~~する ^{ため}爲に ^{きた}來らん ^{とき}時、^わ我が ^{ひそか}隠なる ^{こと}事を ^{あらわ}顯す ^{なか}勿れ、^わ我が ^{なんじ}爾の ^{おお}多くの ^{じれん}慈憐を ^{さんえい}讃榮せん ^{ため}爲なり。~~

~~人の ^ほ諸子は ^ほ主を ^ほ崇め讃めよ、^ほイズライリ民は ^あ主を ^あ崇め讃めよ、^あ彼を ^あ歌ひて ^あ世々に ^あ讃め揚げよ、~~

~~^{ごうにん}恒忍にして ^ぎ義なる ^{しんばんしや}審判者よ、^{なんじ}爾は ^{しんばん}審判座の ^ざ前に ^{まえ}立ちて ^た審判せらるる ^{しんばん}時、^{とき}爾の ^{なんじ}十字架を ^{じゅうじか}以て ^{もつ}~~

~~^{あだ}仇を ^{ていざい}定罪し ^{たま}給へり。故に ^{ゆえ}畏を ^{おそれ}以て ^{もつ}呼びて ^よ爾の ^{なんじ}仁愛を ^{じんあい}讃め揚ぐる ^ほ者を ^あ永遠の ^{もの}定罪より ^{えいえん}救ひ ^{ていざい}給 ^{すく}~~

~~へ。~~

~~主の ^ほ司祭等、^ほ主の ^あ諸僕は ^あ主を ^あ崇め讃めよ、^あ彼を ^あ歌ひて ^あ世々に ^あ讃め揚げよ、~~

~~^{むかしけいけん}昔 ^{しょうしや}敬虔の ^{ものいみ}少者は ^ひ齋の ^ね火に ^{しんせい}鍊られて、^{つゆ}神聖なる ^{もつ}露を ^{じつ}以て ^{いとたか}實に ^{ほのお}最高き ^け燄を ^{われら}滅したり。我等も~~

ものいみ ことごと よく いろり け ほのお まぬが ため
齋して、悉くの慾の爐を滅さん、「ゲエンナ」の燄を免れん爲なり。

諸神[°]と諸聖人の^{たましい}靈と、諸義人と心の謙^{けんび}卑なる者と主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め
あ
揚げよ、

[生神女讃詞] 婚姻に與らざる少女よ、神の睿智は爾より己の爲に殿を造りて、言ひ難き寛容
を以て身を取り給へり、蓋爾獨無玷なる者は萬族の中より無玷なる言の居處の爲に選ば
れたり。
イルモス、「昔シナイ山に於て棘の中に」

アナニヤ、アザリヤ、ミサイルは主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ、

ことば もつ ばんぶつ たも なんじ われ ため ほお う つばき
言を以て萬物を持つハリストスよ、爾は我の爲に頬を批たること、唾せらるること、
じゅうじか てい いっさいしの たま われなんじ じんあい しだい ばんせい あが ほ
十字架に釘せらるることを一切忍び給へり。我爾の仁愛の至大なるを萬世に崇め讃む。

主の諸使徒、預言者、致命者は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ、

ハリストスよ、爾は脅を刺されて 羔の如く殺さる、我迷ひし羊を惡魔の網より救ひて、世
よ なんじ よ おり い ため
世に爾の善き牢に入れん爲なり。

我等主なる父と子と聖神[°]とを崇め讃めん。

[聖三者讃詞] 惟一の神性たる三者、分たれぬ性、分れたる三位、永在なる權柄、父と子と聖神
よ、われらなんじ ばんせい あが うた
よ、我等爾を萬世に崇め歌ふ。

今も何時も世々に、「アミン」

[生神女讃詞] 潔き神の母、天の戸、救の門よ、爾を萬世に讃揚する衆「ハリストティアニ
ン」の祈禱を納れ給へ。

我等の神よ、光荣は爾に帰す、光荣は爾に帰す。

ハリストスよ、爾の十字架を以て司祭等は誇り、諸王は堅められ、凡の信者は照さる、我

これ み ふくはい よ よ うた え たま
に之を見て、伏拜して、世々に歌ふを得しめ給へ。

(詠) 我等主を讃め、崇め、伏し拝みて世々に歌ひ讃めん、

(詠) イルモス 2調 「昔シナイ山に於て棘の中にモイセイに童貞女の奇跡を預め示しし者を尊み
歌い、崇め讃めて、萬世に讃め揚げよ。」

第8歌頌イルモス

我等主を崇め讃め伏し拝みて世々に うたい 讃 めん。
むかし シナイ山に お いて、 いばら の うちに
モイセイに童貞女の奇跡を預め示し ものを
尊とみ歌い崇め 讃 めて 萬世に 讃 め あげ よ

司祭 生神女光の母を讃歌を以て讃め揚げん。

(詠) [ヘルビムの歌]

第1句 我が心は主を崇め、我が 靈 は神我が救主を悦ぶ。

附唱 ヘルビムより尊く、セラフィムに並びなく栄え、貞操を破らずして神言を生みし、
実の生神女たる爾を崇め讃む。

第2句 その婢の卑しきを顧み給へり、今より萬世我を福なりと言はん、 →附唱ヘルビムより尊く

第3句 権能を持ち給へるものは、我が為に大なる事を為せり、其の名は聖なり、其の憐れみは世世 彼
を畏るる者に臨まん →附唱ヘルビムより尊く

第4句 其の肘の力を表して、心の驕れるものを散らし給へり、 →附唱ヘルビムより尊く

第5句 権ある者を位より斥け、卑しき者を上げ、飢うる者を善に飽かせ、富める者をむなしく帰らせ給へ
り。 →附唱ヘルビムより尊く

第6句 其の僕、イズライリを納れて、我が先祖に告げしが如く、アウラアムと其の裔を世々に憐れむ事を
記憶し給へり、 →附唱ヘルビムより尊く

第九歌頌 聖ザハリヤの歌句、ルカ六十八至七十九節

右誦經句 ^{しゆくさん} 祝讃 ^{かな} せらるる哉、^{しゆ} 主 ^{かみ} イズライリの神、^{けだしそのたみ} 蓋 ^{かえり} 其民を眷 ^{これ} みて、^{あがない} 之に ^な 贖 ^な を爲し、

左誦經句 ^{われら} 我等の爲に ^{ため} 救 ^{すくい} の角 ^{つの} を其僕 ^{そのぼく} ダウィドの家に興 ^{いえ} せり、^{おこ}

右 句 ^{こせい} 古世より ^{そのせい} 其聖なる ^{よげんしゃ} 預言者の ^{くち} 口 ^{もつ} を以て ^い 言ひしが ^{ごと} 如し、

左 句 ^{すなわちわれら} 即 ^わ 我等を我が ^{しよてきおよ} 諸敵 ^{およ} 及び凡 ^{われら} そ我等を悪む ^{にく} 者の ^{もの} 手より ^て 救 ^{すく} ひ、

右 句 ^{もつ} 以て ^{あわれみ} 矜恤 ^わ を我が先祖に ^{せんぞ} 施 ^{ほどこ} し、^{そのせい} 其聖なる ^{やく} 約、^{すなわちわ} 即 ^そ 我が祖 ^{ちか} アウラアムに ^{ちか} 矢 ^{ちか} ひたる

^{ちかい} 誓 ^{きねん} を記念せん、

~~イルモス「我等信者は影及び文なる律法に於て」。~~

~~^{すなわち} 其聖なる約 ^{ちか} 即 ^{ちか} 我が祖 ^{ちか} アウラアムに ^{ちか} 矢 ^{ちか} ひたる ^{ちか} 誓 ^{ちか} を記念せん、~~

^{じんあい} 仁愛なる ^{へび} イイススよ、^き モイセイは蛇 ^{うへ} を木 ^あ の上 ^{なんじ} に舉 ^{あまん} げて、^{じゅうじか} 爾 ^あ が甘 ^あ じて ^あ 十字架 ^あ に舉 ^あ げられ、

^{きょうあくしや} 兇惡者の ^{あくどく} 惡毒 ^{いや} を醫 ^{ひとびと} して、^{おのれ} 人人 ^つ を己 ^{よちょう} に就 ^{よちょう} かしめし ^{よちょう} を預 ^{よちょう} 兆 ^{よちょう} せり。

^い 謂 ^{おそれ} ふ、我等に我が ^{おそれ} 諸敵 ^{おそれ} の手より ^{おそれ} 救 ^{おそれ} はれし後、^{おそれ} 懼 ^{おそれ} なく、^{おそれ} 彼の ^{おそれ} 前に ^{おそれ} 在 ^{おそれ} りて、^{おそれ} 聖 ^{おそれ} を以 ^{おそれ} て、^{おそれ} 義 ^{おそれ} を以 ^{おそれ} て、

^{つか} 生涯 ^{つか} 彼 ^{つか} に事 ^{つか} へしめんと。

^{なんじ} ハリストスよ、^{おそ} 爾 ^{おそれ} を畏 ^ひ るる ^{もつ} 畏 ^{われ} の火 ^{きよ} を以 ^{なんじ} て我 ^{あい} を潔 ^{しんせい} め、^{あい} 爾 ^わ を愛 ^{たましい} する ^{うち} 神聖 ^{うち} なる ^{うち} 愛 ^{うち} を吾 ^{うち} が ^{うち} 靈 ^{うち} の中 ^{うち}

^{もや} に燃 ^{なんじ} し、^{じゅうじか} 爾 ^{もつ} の十字架 ^{いにしえ} を以 ^{ゆうわくしや} て ^{いつらく} 古 ^{いざな} の誘惑 ^{くら} 者が ^わ 逸 ^{ちえ} 樂 ^{てら} にて ^{まも} 誘 ^{まも} ひて ^{まも} 味 ^{まも} まし ^{まも} し ^{まも} 我が ^{まも} 智慧 ^{まも} を照 ^{まも} して ^{まも} 護 ^{まも} り

^{たま} 給 ^{たま} へ。

^{とな} 子よ、爾も至上 ^{とな} 者の ^{とな} 預言者 ^{とな} と称 ^{とな} へられん、^{とな} 蓋 ^{とな} 主 ^{とな} の面前 ^{とな} に行 ^{とな} きて ^{とな} 其 ^{とな} の道 ^{とな} を備 ^{とな} へん、

^{けいてい} 兄弟 ^{われら} よ、我等 ^{けが} は汚 ^{おもひ} らはし ^あ き ^{おこない} 思 ^{ものいみ} と惡 ^{こころ} しき ^{きよ} 行 ^{しんせい} とを ^{しよとく} 齋 ^{あが} し、^{あが} 心 ^{あが} を潔 ^{あが} めて、^{あが} 神聖 ^{あが} なる ^{あが} 諸 ^{あが} 徳 ^{あが} に ^{あが} 舉 ^{あが} り、

^{しも} 下 ^{いや} なる ^{おもんばかり} 卑 ^{しりぞ} しき ^{きよ} 慮 ^{もの} を退 ^{おおい} けん、^み 淨 ^{ため} き者 ^{ため} として ^{ため} 大 ^{ため} なる ^{ため} 「^{ため} パスハ ^{ため} 」。 ^{ため} を見 ^{ため} ん ^{ため} 爲 ^{ため} なり。

^{すなわち} 彼の ^{ゆるし} 民 ^{あわれみ} に、其 ^{あわれみ} 救 ^{あわれみ} は ^{あわれみ} 即 ^{あわれみ} 諸 ^{あわれみ} 罪 ^{あわれみ} の ^{あわれみ} 赦 ^{あわれみ} に ^{あわれみ} して、^{あわれみ} 我が ^{あわれみ} 神 ^{あわれみ} の ^{あわれみ} 矜 ^{あわれみ} 恤 ^{あわれみ} に ^{あわれみ} 囚 ^{あわれみ} る ^{あわれみ} こと ^{あわれみ} を知 ^{あわれみ} らしめん。

〔生神女讃詞〕 童貞女よ、本性の富める者は甘じて爾より我が貧しきを衣、見えざる者は我等に見らるる者と爲り、天上の會に歌はるる者は壞れたる像を新にし給へり、其慈憐に因りてなり。

此の矜恤に因りて、東旭は上より我等に臨めり、

十字架に手を伸べて、四極を己に屬せしめし神の子よ、我等衆爾に由りて父に入る門を得たる者は爾を崇め讃む。

幽暗と死の蔭とに坐する者を照し、我等の足を平安の道に向はしめん為なり。

ハリストスよ、不法の者は爾に棘を冠らせ、爾を批ちて、十字架に釘せり、普天下は此に由りて動き、我等は救はれて爾を崇め讃む。

光栄は父と子と聖神[°]に帰す

〔聖三者讃詞〕 我等は爾三光の聖なる神性、萬有を持ちて、常に護り給ふ父、子、生活の神を默さざる歌を以て崇め讃む。

今も何時も世々に、「アミン」

〔生神女讃詞〕 生神女よ、爾は神[°]の輝ける雲なり、是より我等の為に近づき難き光たるハリストス、義の大いなる日は輝き出でたり。故に我等歌を以て爾を崇め讃む。

我等の神よ、光栄は爾に帰す、光栄は爾に帰す。

ハリストスの十字架よ、爾は我等の爲に光、聖なる旗、勝利の記號なり、爾我等に節制を樂しき者となして、爾に伏拜するを得しめよ。

（詠） イルモス3調「生神女よ、爾は属神[°]の活ける梯なり、神は此の上に立ち給う、我等此に因りて天に升るを得て、歌を以て爾を崇め讃む。」（次ページ）

第9歌頌イルモス



〈戻る。枠の P15「常に福」へ〉

斎3

くづけ スティヒラ
【挿句の 讃頌】

我無^{われ}智^{むち}なる者は仁慈^{もの}なる父^{じんじ}の子^{ちち}たる貴^こきを有^{とおと}ちて、悟^{たも}らざりき、即^{さと} 惡^{すなわち}しく恩^あ寵^{おんちよう}の富^{とみ}を費^{ついや}
して、自^{みづか}ら光^{こうえい}榮^{うしな}を失^{しんせい}へり。神^{かて}聖^{とぼ}なる糧^{けが}に乏^{じゅうみん}しくして、汚^{きやく}らはしき住^な民^{かれ}の客^なと爲^なり、彼^{かれ}よ
り其^{そのたましい}靈^{ほろぼ}を滅^たす田^{つかわ}に遣^{ほうとう}されて、放^{せいかつ}蕩^{けもの}に生^{とも}活^かして、獸^{いつらく}と共^{えき}に牧^あはれ、逸^え樂^えに役^えして飽^あくを得^え
ざりき。故^{ゆえ}に還^{かえ}りて、洪^{こうおん}恩^{じれん}慈^{ちち}憐^よなる父^{われてんおよ}に呼^{なんじ}ぶ、我^{まえ}天^{つみ}及^えび爾^{われ}の前^{あわれ}に罪^{たま}を獲^{ねが}たり、我^{ねが}を憐^{ねが}み給^{たま}
へ。

(本来は2回)

句) 主^{しゅ}よ、夙^{つと}に 爾^{なんじ}の 憐^{あわれみ}を以^{もつ}て我^{われら}等^あに飽^{しか}かしめよ、然^{われら}せば我^{しょうがい}等^{よろこ} 生^{たの}涯^{たの} 歡^{たま} び樂^{ねが}しま
ん。 爾^{なんじ} 我^{われら}等^うを撲^ひちし日^{われら}、我^{わざわい}等^あが 禍^{とし}に遭^かひし年^{われら}に代^{たの}へて、我^{たま}等^{ねが}を樂^{ねが}しましめ給^{たま}へ。願^{ねが}
はくは 爾^{なんじ}の工^{わざ}作^{なんじ}は 爾^{しよぼく}の諸^{あらわ}僕^{なんじ}に 著^{なんじ}れ、 爾^{こうえい}の光^{そのしよし}榮^{あらわ}は其^{あらわ}諸^{あらわ}子^{あらわ}に 著^{あらわ}れん。

(スティヒラ繰り返し略)

句) ^{ねが}願はくは^{しゅわ}主^{かみ}吾が^{めぐみ}神の^{われら}恵は^あ我等に^{ねが}在らん、^わ願はくは^て我が^{わざ}手の^{われら}工作を^{たす}我等に^{たま}助け給へ、^わ我が^て手の^{わざ}工作を^{たす}助け^{たま}給へ。

【致命者讃詞】

ハリストスよ、^{なんじ}爾の^{せいじん}聖人の^{たいすう}大数は^{なんじ}爾に^{いの}祈る、^{ひと}人を^{あい}愛する^{しゅ}主として^{われら}我等を^{あわれ}憐みて^{すく}救ひ^{たま}給へ。
光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン

【十字架生神女讃詞】

^{しじょう}至^{もの}淨なる^{なんじ}者よ、^{おのれ}爾は^こ己の^{およ}子及び^{かみ}神が^{じゅうじか}十字架に^{てい}釘せらるる^{とき}時、^{おお}多くの^{くるしみ}苦を^{しの}忍び、^{たんそく}歎息して
^な泣き、^{かな}悲しみて^よ呼べり、^{ああ}嗚呼^{かんあい}甘愛なる^こ子よ、^いアダムの^{ちじょう}より^{もの}出で^{すく}たる^{ほつ}地上の^{もの}者を^{すく}救はんと^{ほつ}欲して、
^{いかん}如何ぞ^{ひぎ}非義に^{くるしみ}苦を^う受くる。至^{しせい}聖なる^{どうていじょ}童貞女よ、^{われら}我等^{ねつしん}熱信に^{なんじ}爾に^{いの}祈る、^{かれ}彼を^{われら}我等の^{ため}爲に^{じんじ}仁慈
なる^{もの}者と^な爲し^{たま}給へ。

＜→戻る。 **枠** P19「至上者よ」へ＞

六時課

斎4【預言のトロパリ】 八調

^{しゅ}主よ、^{しわざ}行爲の^{ぜんか}善果は^{われら}我等に^あ有るなし、^{ひと}人を^{あい}愛する^{もの}者よ、^{なんじ}爾は^{じんじ}仁慈なり、^{つみ}罪なき^{もの}者よ、^{なんじ}爾の
^て手の^{わざ}造工を^す棄つる^{なか}母れ。

◆ポロキメン第4調

司祭 ^{つつし}謹^きみて^き聴くべし。

誦經 ^{ポロキメン}提綱、^{さんび}讃美を^{もつ}以て^{かみ}神に^{けん}獻ぜよ、^{なんじ}爾の^{ちかい}誓を^{しじょうしや}至上者に^{つぐな}償へ。

誦經 (句) ^{しよしん}諸神の^{かみしゅ}神主は^{ことば}言を^{いだ}出して^ち地を^め召す。



司祭 えいち
睿智。

誦經 よげんしよ よみ
イサイヤの預言書の讀

主はシオン山とイエルサリムとに 悉く其事を成し畢る時云はん、我アツシリヤ王の傲れる
心の實と、其仰ぎたる目の矜驕とを臨み視ん。彼言ふ、我我が手の力と我が智慧とを以て
之を爲せり、蓋我は明哲なり、我諸民の界を除き、其財を奪ひ、勇士の如く、位に坐す
る者を下す、我が手諸民の富を獲たること、巢を取るが如し、其中に遺されたる卵を拾ふ
が如く、我是くの如く全地を拾へり、一も翼を動かし、或は口を啓き、或は喃喃する者な
かりき。斧は之を執りて伐る者に對ひて誇るか、鋸は之を動かす者に對ひて詔るか、豈
は之を擧ぐる者を攻めんや、豈杖は木ならざる者に逆はんや。此に縁りて主萬軍の主は其肥
えたる者を瘠せしめ、其光榮の間に火を起すこと、盛なる火焰の如くならん。イズライリ
の光は火と爲り、彼の聖者は火焰と爲らん、此れ一日の間に其棘と荊とを焚き盡し、其
榮えたる林と園とを靈より體に至るまで滅さん、彼は死せんとする病者の如くならん。
其林の木の残れる者は幾くもなくして、童子も之を數へて書すを得ん。當日イズライリの
遺れる者と、イアコフの家の逃れたる者とは、復彼等を撻ちし者に倚らずして、誠を以て主
イズライリの聖者に倚らん。

晩 課

斎 5 【主よ、爾によぶ】を4調

①
主や汝によぶすみやかに我れにいたりたまえ 主やわれ
②
に聞きたまえ 主やなんじに呼ぶすみやかに我れにいたり
③
④
たまえ 汝に呼ぶときわが祈りの声をいれた ま え
終
主やわれに聞きたま え ねがわくは我が祈りは香炉の香りの
①
②
③
ごとく汝がかんばせの前のぼりわが手をあぐるはくれ
終
の祭のごとくいられん 主やわれに聞きたま え

誦経 しゅ わ くち まもり お わ くちびる もん ふせ たま わ こころ よこしま
主よ、我が口に 衛 を置き、我が 唇 の門を扞ぎ給へ、我が 心 に 邪 なる

ことば かたぶ ふほう おこな ひと とも つみ いいわけ なか
言 に 傾 きて、不法を 行 ふ人と共に罪の 推諉 せしむる 母れ。

わ こえ もつ しゅ よ わ こえ もつ しゅ いの わ いのり そのまえ そそ わ うれい
我が聲を以て主に籲び、我が聲を以て主に祷り、我が 祷 を其前に注ぎ、我が 憂 を

そのまえ あらわ わ たましいわれ うち よわ とき なんじ われ みち し わ ゆ みち
其前に 顯 せり。我が 靈 我の衷に弱りし時、 爾 は我の途を知れり、我が行く路

おい かれら ひそか わ ため あみ もう われみぎ め そそ ひとり われ みと
に於て、彼等は 竊 に我が爲に網を設けたり。我 右に目を注ぐに、一人も我を認むる

もの われ のが ところ わ たましい かえりみ もの しゅ われなんじ よ い
者なし、我に遁るる 所 なく、我が 靈 を 顧 る者なし。主よ、我 爾 に呼びて云へ

なんじ われ かくれが い もの ち おい われ ぶん わ よ き たま われ
り、 爾 は我の 避所 なり、生ける者の地に於て我の分なり。我が籲ぶを聴き給へ、我

はなはだよわ 甚 弱りたればなり、われ はくがい もの すく たま かれら われ つよ
彼等は我より強ければなり。

<中略>

(句) 我が靈を獄より引出して、我に爾の名を讃榮せしめ給へ、

自調の讃頌、第4調

われ ほうとう 我放蕩にして我が父の富を 費し、空しくなりて、悪しき住民の地に入り、無言無知の獸に

に 似たる者と爲りて、凡の神聖なる恩寵を褫がれたり。故に 爾 慈憐にして洪恩なる父に歸り

て呼ぶ、神よ、我罪を犯せり、我痛悔する者を納れて、我を憐み給へ。

(句) 爾恩を我に賜はん時、義人は我を環らん。

い 活ける 祭、靈智なる全燔、主の致命者、全備なる屠殺、神を知り又神に知らるる 羔、

其牢に 狼 の入る能はざる者よ、我等も爾等と偕に 靜 なる水の畔に牧せられて休はんこ

とを祈り給へ

(句) 主よ、我深き處より爾に籲ぶ。主よ、我が聲を聴き給へ。

又讃頌、イオシフ師の作、第三調。

れいち 靈智なる日の光と 顯れし見神者たる諸使徒よ、我が 靈 の爲に光照と諸慾の黑暗より脱る

ることとを求め給へ。至りて睿智なる傳道を以て世界を救ひし者よ、我等が 齋 と祈禱とを

以て兇惡者に傷つけられし心を潔めて、救の日を見るを得んことを祈り給へ、我等が救は

れて、熱信を以て常に爾等を 尊 まん爲なり。

(句) 願くは爾の耳は我が禱の聲を聴き納れん。

じれん 慈憐なる父よ、我放蕩の者は悪しき地に離れて、爾 が我に賜ひし富を悪しく 費 して、今善き

行 の飢に苦しみ、神の恩寵を褫がれて、罪犯の恥を衣て、爾 に我罪を犯せりと呼ぶ、爾

の仁慈を知ればなり。洪恩なるハリストスよ、爾 を愛する諸使徒の祈禱に由りて、我を 爾

が傭人の一の如く納れ給へ。

(句) 主よ、爾若し不法を糾さば、主よ孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人の爾の前に敬しまん爲なり。

救世主の諸使徒、全地の燈と恩者及び救者、諸天の如く神の光榮を傳ふる者、奇跡の星と

醫治の休徴とに飾られたる者よ、熱切に我等の爲に主に祈禱を奉りて、我等の禱を清き

香として享けて、我等衆に畏を以て生命を施す十字架を見て、之に接吻するを得しめん

ことを求め給へ。救世主よ、之に伏拜するに因りて我等に爾の仁慈を遣し給へ、爾は人を

愛する主なればなり。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。



その週の調の生神女讃詞

八調經別冊参照

<=>戻る、梓 P60 「聖にして福たる」>

斎6 【ポロキメン】と旧約聖書の読み

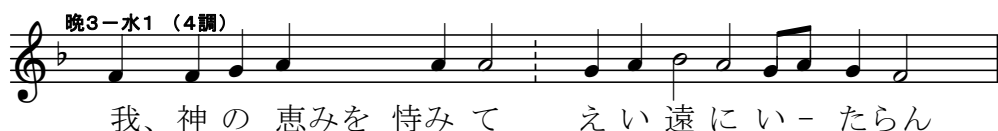
輔祭 謹みて聴くべし

司祭 衆人に平安

輔祭 睿智、謹みて聴くべし

誦經 我神の恵を恃みて永遠に迄らん。

誦經 (句) 剛き者よ、何爲れぞ惡業を以て誇る。



司祭、睿智。

1 大斎第一週奉事式ではすべて一調で代用している。本来はその週、その曜日の生神女讃詞。または月課經のその日の生神女讃詞。

誦經、^{そうせいき よみ}創世記の讀。

司祭、^{つつし き}謹みて聽くべし。

【創世記七章】

誦經 ^{ろくひやくさい}ノイ六百歳にして、^{ち こうずい}地に洪水ありき。^{およ その しよし}ノイ及び其諸子、^{そのつま}其妻、^{その しよし つま}其諸子の妻は、^{かれ}彼と
^{とも こうずい よ}偕に洪水に縁りて^{はこぶね い}方舟に入りたり。^{きよ とり きよ}潔き鳥、^{とり きよ}潔からざる鳥、^{ちくるい きよ}潔き畜類、^{ちくるい けもの}潔からざる畜類、獸、
^{およ およ}及び凡そ^{ち は}地に^{もの}葡ふ者、^{めお おのおのふたつ}牝牡各二、^つノイに就きて^{はこぶね い}方舟に入りたり、^{しゅ かみ}主神のノイに^{めい}命ぜしが^{ごと}如し。

輔祭 ^{つつし き}謹みて聽くべし。

誦經 ポロキメン、^{かみ}神が^{そのたみ}其民の^{とりこ}虜を^{かえ}返さん時、^{とき}イアコフは^{よろこ}喜び、^{たの}イズライリは^し樂しまん。

誦經 (句) ^{むち}無知なる^{もの}者は^{そのころ}其心に^{かみ}神なしと^い謂へり。



輔祭 ^{めい}命ぜよ。

兩手に香炉と火つけた燭台を取り、宝座の前に立ち、東に向かって十字を描いて、

司祭 睿智、肅みて立て。

(それから西に向き直って、会衆に向かって)

司祭 ハリストスの光は衆人を照す。 (このとき会衆は伏拝する。) ²

司祭、睿智。

誦經、^{しんげん よみ}箴言の讀。

² エルサレムの聖墳墓教会の受難週に灯りを取る儀式から始まったと言われる。

こ なんじ も ちえ おのれおよ となり ため ちえ も ぼうまん なんじひとりこれ お
子よ、爾 若し智慧あらば、己 及び 鄰 の爲に智慧あるなり、若し暴慢ならば、爾 獨之を負

いつわり もとづ もの かぜ ぼく とぶとり お けだしかれ その ぶどうえん みち はな その た こみち
はん。詐譌に 基く 者は風を牧し、飛鳥を逐ふ、蓋 彼は其葡萄園の途を離れて、其田の徑に

まよ みず あれ ち かわき さだ ち す その て ふさく おさ おろか
迷ひ、水なき荒地、乾燥に定められし地を過ぎ、其手にて不作を歟む。愚

かまびす つたな なにごと し おんな そのいえ もん かたわら まち たか ところ あ
にして 喧しく、拙くして何事をも知らざる 婦は、其家の門の 旁に、邑の 高き 處に在る

ざ すわ なお おのれ みち す ゆきき ひと よ い おろか もの これ きた ちえ とぼ
座に坐り、直く 己の途を過ぐる往來の人を呼びて云ふ、愚なる者よ、此に來れ、智慧の乏し

もの い ぬす みず うま ひそか くら パン よ あじわい かしこ あ もの し もの
き者に謂ふ、竊みたる水は甘く、密に食ふ餅は美き 味ありと。彼處に在る者は死したる者

そのきやく じごく ふかみ あ かれら し しか なんじすみやか はな か
にして、其客は地獄の深處に在ることを彼等知らざるなり。然れども 爾 速に離れよ、彼の

ところ とど なか かれ なんじ め そそ なか けだしか ごと なんじ た みず す なんじ た みず
處に留まる母れ、彼に 爾の目を注ぐ母れ、蓋 是くの如く 爾は他の水を過ぎん。爾 他の水

さ たにん いずみ の なか なんじ ひ おお なんじ いのち とし ま ため
を避けよ、他人の泉より飲む母れ、爾の日の多くせられ、爾の生命の年の増さん爲なり。

(次に先備聖體禮儀を行ふ)